

清水幾太郎における「庶民」のゆくえ

大久保孝治

本稿は、60年安保闘争後の清水幾太郎の思索の軌跡を、大衆社会の到来と変容との関連において、とらえようとするものである。

もし一人の閑人がいて、この二十年間、私が自ら残して来た証拠を一つ一つ辿ってくれたら、彼は、私が、経験の成長の緩慢な過程を経て、漸く、『日本よ 国家たれ - 核の選択』まで来たことを知ってくれるであろう。(清水 1980 : 265)

1. 最終講義

1969年1月18日午後1時半、学習院大学の中央教室(俗称ピラミッド教室)で、学生、卒業生、一般人合わせて約800名の聴衆を相手に、清水幾太郎の最終講義が始まった。講義のテーマは「オーギュスト・コント」。かつて東京帝国大学の社会学科の学生だった清水が卒業論文で扱った「社会学の父」である。

同じ頃、学習院大学のある目白からは目と鼻の先の東京大学本郷キャンパスでは、安田講堂に立て籠もる全学共闘会議派の学生と警視庁の機動隊との間で激しい攻防戦が展開されていた。1年前の医学部研修医問題に端を発した東大紛争がついに終結のときを迎えようとしていたのだ。

清水は、自分がコントに惹かれたのは、コントの学説そのものよりもコントの生き方、官僚然とした東京帝国大学の教員たちとは対照的なコントの自由な生き方と考え方に惹かれたためであると述べた後で、こう付け加えた。

私は、最近の東大のことは知りません。加藤代行以下の諸君が何を考えているのか、私は知らないし、あまり興味もない。興味もないが、私がかつて味わった東京帝国大学の非人間的な冷たさと狭さとがどこかに残っているということが、恐らく、反日共系の諸君の行動の一部であらうと考えます。(拍手)(清水 1969a : 268)

清水が最終講義の中で東大紛争に言及した部分はこれだけだったが、数ヵ月後、『諸君』1969年7月号(創刊号)に掲載されたインタビュー「戦後史をどう見るか」の中で、清水は学生の実力行使に一定のプラスの評価を与える発言をしている。

私たちは、もう、一遍、「もはや戦後ではない」という言葉を思い出す必要がある。敗戦直後には、平和や民主主義という言葉の上に、戦前および戦中の民族的経験の大きな影が射していた。あの窮乏、不安、抑圧からの救済への欲望が、これらの言葉を包んでいた。平和も民主主義も、敗戦という犠牲を払って辛くも手に入れたもの...そういう空気が六〇年安保を燃え立たせもしたし、また、それを民主主義の枠に閉じこめもしたのです。それは貴重なものだったのです。しかし、七〇年となると、もう、どこにも、戦前や戦中と連続する戦後は生きていません。平和にしる、民主主義にしる、現在の学生が生まれる以前からあったもので、彼らにとって、それは貴重なものであるよりは、平凡なもの、陳腐なものに過ぎません。それは当たり前のことです。この当たり前のことから生まれた一つの成果は、学生たちの暴力によって初めて大学が多少の改革へ動き出したということではないでしょうか。(清水 1969b: 300-1)

六〇年安保闘争において、国民ひとりひとりによる請願というソフトな方法からデモ隊の国会乱入というハードな方法まで、一貫して直接行動を提唱し、あるいは支持した清水らしい発言である。

学習院大学の教員の定年は70歳であるが、当時、清水は61歳6ヵ月、定年まであと9年を残しての退職であった。その理由についてマスコミはあれこれ詮索したが(1)、最終講義の終わり近くで清水が語った理由は次のようなものである。

私は、講義を一生懸命にやるたちであります。ところが、一生懸命にやっても、最近は、どうも、後味が悪いのです。もう少し立派な講義が出来る筈だという気持が残るのであります。今日の最終講義もソロソロ終わるのですが、やはり、後味がよくありません。そういう状態で講義を続けることは、私自身の精神衛生にとっても良くありませんし、諸君にとっても良いことではありません。この辺でわが家の古い書齋へ戻ろうと思うのであります。家庭には、カロリーヌ・マッサンでもなく、クロティルド・ド・ヴォーでもなく、清水慶子がおります。(拍手、笑声)(清水 1969a: 292-3)

コントの妻と愛人の名前の後に評論家としても知られる自分の妻の名前をあげて聴衆の拍手と笑いを誘ってはいるが、実は、清水がここで述べていることは、聴衆の多くを占める学生にとっては耳の痛い話なのである。一生懸命に講義をしても「最近、どうも、後味が悪いのです」ということの意味は、要するに、学生の質が低下してきたということである。学生本人を前にして、しかも最終講義の中で、そういう直截な表現はとれないから、遠回しな表現をしているが、言わんとしていることはそういうことである。

もっと後になって、別の場所で、清水は学習院大学の退職の理由について直截な表現で次のように語っている。

外部の方には想像もされないでしょうが、大抵の大学では、いざ、学年試験を行うとなりますと、平常の三倍も四倍もの教室を用意する必要が生じるものなのです。つまり、平常は、学生の大部分は登校せずに、喫茶店、マージャン屋、パチンコ屋、ボウリング場など、他のレジャー施設を利用して、試験の時だけ、大半は先生の顔も知らないまま、大学というレジャー施設へ現れて来るのです。また、大学側もそれを前提して、学生の一部分を収容する教室しか用意していないのです。毎日、全員が真面目に登校するようになったら、大学は忽ち破産してしまうでしょう。双方馴れ合いでレジャー施設になっているのです。…(中略)…昭和四十四年春、まだ定年には九年あったのですが、私は学習院大学を退職しました。退職の理由は沢山ありましたが、その一つは、「私はレジャー業者ではない」という小さな誇りでした。(清水 1974 : 69-70)

ここで語られていることは、大学の大量化という現象である。清水が平和問題談話会の議長である安倍能成に請われて学習院大学の教授になったのは 1949 年 4 月であるから、清水は戦後の新制大学の変遷をその発足時から現場でずっと見てきたわけである。統計資料によれば、1949 年度の全国の 4 年制大学の学部生の数は 123,987 人(男子 116,340 人、女子 7,647 人)で、1968 年度のそれは 1,211,068 人(男子 991,126 人、女子 219,942 人)である。つまり 20 年間でちょうど 10 倍(男子 8.5 倍、女子 29 倍)になったのである(文部省 1972 : 454-5)。これで学生の質が低下しなかったらおかしいだろう。

清水は身近に接する学生の質の変化という観点から、自分の大学教師としての 20 年間

を3つの時期に分けている（清水 1974）。

第1期は、まだ敗戦後の窮乏や混乱が明らかな時期（1950年代前半）

第2期は、経済の成長や政治の安定が始まった時期（1950年代後半）

第3期は、高度成長に入ってから（1960年代）

大学の大衆化が急速に進んだのは第3期である。この時期は、清水の人生においては、安保闘争の敗北を機に彼が活動の中心を平和運動から研究生活にシフトした後の時期である。研究者として生きることは、10数年に渡って続いた平和運動の期間中、清水がずっと望んでいたことであった。それだけに学問の府であるべき大学のレジャー施設化は清水には耐え難いことであつたらう。大学紛争に参加している学生に対してはシンパシーを示した清水だが、学生一般への評価はきわめて辛かつたのである。そして大衆化した大学の学生一般への評価はそれを含むところの大衆への評価でもあつた。

2. 『倫理学ノート』の「余白」

最終講義の前年、清水は岩波書店の雑誌『思想』1968年10月号に「倫理学ノート(一)」と題する論文を発表している。以後、連載は断続的に19回に及び、4年後の1972年11月に単行本として出版され、清水の代表作の一つとなるのだが、これは清水が執筆するはずの、しかし、書かれることなく終わった、岩波全書『倫理学』の副産物であった。

清水が岩波書店から5冊の「岩波全書」(『社会学概論』『社会心理学』『倫理学』『現代思潮』『教育原理』)の執筆を依頼され引き受けたのは、1949年5月のことであつた。以後、「岩波全書」の執筆は清水にとって学者としてのアイデンティティの拠り所となつた。

「岩波全書」は、ポピュラーな「岩波新書」と違って、かなりアカデミックな叢書で、ただ自分の見解を述べるだけでなく、従来主要学説の紹介や批評を含むことになっていたのだから、どの一冊にしろ、右から左へ書けるものではなかつた。…(中略) …コツコツ勉強しながら、一冊ずつ書き上げていくのは、辛いけれども楽しい仕事で、それが進んで行けば、自然に私の体系のようなものが生まれることになるであろう、研究者の本懐というべきではないか、何処まで進めるか見当はつかないが、全書の執筆を自分の一生の事業にしてもよのではないかと私は考えた。(清水 1975: 328-9)

5冊の「岩波全書」のうち最初に出たのは『社会心理学』(1951年10月)で、引き受けてから2年半後だった。しかし、次の『社会思潮』改め『現代思想』上下二巻が出たのは17年後の1966年4月のことだった。米軍基地反対闘争や安保闘争に深く関わりながら、闘争の合間を縫って、学術的な著作を書き下ろすことは困難だったのである。

『現代思想』の次に清水が取りかかったのが『倫理学』だった。実は、清水は『現代思想』よりも先に『倫理学』を書くつもりで早くから準備を始めていたのであるが、現代倫理学の源流ともいべきムアの『倫理学』(1903年)を読んで、「この面白くもない、役にも立たぬ学説に忠実な解説を施さねばならぬのなら、『倫理学』など書きたくない」(清水1972b: 321)と、執筆を断念してしまったのである。

ムアによれば「善」は定義不可能なものである。なぜなら定義という行為は定義しようとする対象をその構成要素に分解することだが、「善」は一つの単純な観念であり、「これは善である」「これは善ではない」と直覚することはできても、定義することはできないのである。また、このことと関連して、何が「善」であるか、「われわれは何をすべきか」を人間の自然の欲求から導き出そうとする伝統的な功利主義も否定される。こうしたムアの分析哲学的なスタンスが一般の人の倫理学に対する期待とあまりにかけ離れたものであることは明らかだろう。

しかし、『現代思想』の執筆を進めるうちに『倫理学』執筆への意欲は再び強くなり、清水は『現代思想』の「あとがき」の中で『倫理学』を予告する。ところが、予告したにもかかわらず、清水は『倫理学』になかなか着手できずにいた。『思想』の編集者が清水にその当惑する気持を書いてみたらどうかと勧め、清水がそれに応じて書いたのが「倫理学ノート(一)」である。連載は2ヵ月、3ヵ月と間が空くことはしばしばあった。こうした断続的な連載は清水には例外的なことである。学術的な論文の連載がいかに多くの時間とエネルギーを必要としたかをうかがわせるものである。けれどもそれは「楽しい散歩」であったと清水は書いている。

いろいろと読み、あれこれと考えて、そこから得た僅かなものを書くのが、結局、私の性に合っているのであろう。とりわけ、或る人の学説と彼の生活とが深く噛み合うようなケースに出会うと、私は夢中になってしまう。...(中略)...連載は、時に急坂や水溜りがあったとはいえ、やはり、楽しい散歩であった。本書が読者にとっても楽しい散歩であることを私は心から願っている。そして、私は、読者が散歩を楽しん

でいる間に、今度こそ、本当に『倫理学』を書かねばならないであろう。(清水 1972b : 5)

清水が長年切望していた学者としての生活がそこにはあった。『現代思想』が運動からの離脱の成果であったとすれば、『倫理学ノート』は教育現場からの離脱の成果であったといえるだろう。

しかし、結局、『倫理学』が書かれることはなかった。『倫理学ノート』の出版から4ヵ月後、清水は文藝春秋のオピニオン誌『諸君!』1973年3月号に「天皇論」を発表し、保守の論客として論壇に復帰する。そして『諸君!』1973年7月号から自身にとって3冊目の自伝となる『わが人生の断片』の連載を開始する。それは人生経験の再検証であると同時に、戦後の日本社会における諸価値の批判的な再検討でもあった。従来の諸価値の批判的な再検討は、必然的に、それとは別の諸価値の提示を伴う。「戦後の教育について」(『中央公論』1974年11月号)、「戦後を疑う」(『中央公論』1978年6月号)、「核の選択 - 日本よ国家たれ」(『諸君!』1980年7月号)と続く、賛否両論、大いに話題となった一連の論文は、学術的な『倫理学』の執筆を断念した清水が書いた、ポスト戦後社会のための実践的な『倫理学』であり、やはり書かれずに終わった岩波全書の一冊『教育原理』の機能的等価物ではなかったか。後から考えれば、こうした清水の急速な転回は、『倫理学ノート』の「余白」と題された長い「あとがき」の末尾で予告されていたといえるかもしれない。

オルテガ・イ・ガセットは、人間を二つのグループに分けて、一を「貴族」と名づけ、他を「大衆」と名づけた。これらの名称は、貧富、職業、学歴などと関係があるものでなく、ただ、前者は、無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者であり、後者は、自分に何一つ要求を課することなく、現にある自己のままで生きる多数者である。それが望ましいか否かは別として、現実の社会には、こういう二つのグループがあるようである。自然的欲望からの自由において、自ら高い規範を打ち樹て、それへ向かって自己を構成して行こうと努力する少数者と、自然的欲望の満足に安心して、トラブルの原因を外部の蔽うものうちのみ求め、自己の構成に堪え得ない多数者。飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての「大衆」に「貴族」たることを要求するところから始まるであろう。しかし、それが不可能であるならば、「大衆」に向かって「貴族」への服従を要求するところから始ま

るであろう。(清水 1972b : 345-6)

この黙示録的文章は、戦後の日本社会の諸価値と明らかに抵触する内容を含んでいる。第1に、「貴族」対「大衆」というオルテガ流の図式は平等の理念に反し、第2に、「服従を要求する」という強い表現は個人の選択の自由の理念に反し、第3に、多数者の少数者への服従は多数決原理に反する。

ここには「大衆」を見下す視線がある。もちろんそうした視線自体は珍しいものではない。「大衆」は見下されるものである。違和感は、ここで「大衆」を見下しているのが「庶民の思想家」清水幾太郎であるという点にある。一体、清水の「庶民」はどこへ行ってしまったのだろうか。

3. 戦略としての「庶民」

「私自身が庶民なのである。」 - そう清水が告白したのは、『展望』1950年1月号に掲載された「庶民」と題する論文の中においてである。

社会の成員の大部分に相当する一般の人々は、時と場合に応じて、さまざまな名称で呼ばれる。国民、臣民、人民...、もし「庶民」がもっと後の時代に書かれていれば、市民や消費者という名称もリストアップされたことだろう。庶民という名称もそうしたものの1つである。それぞれの名称は、その名称を使用する人々の立場や意図を反映して、一般の人々のある側面ある属性を抽象し、強調したものである。すなわち国民は国家の構成員であり、臣民は天皇への服従を誓う神国日本の構成員であり、人民は支配階級と戦う被支配階級の構成員である。

これらに比べると庶民には以下の4つの特徴がある、と清水は指摘する(清水 1950 : 288-90)。第1に、庶民は組織化されていない。「人間が沢山の集団に属してゐるにも拘わらず、またこれ等の集団は各自の組織を持つてゐるにも拘わらず、その総和としての庶民は何等の組織も持つてゐないのである」。第2に、庶民は私的・日常的なものである。「庶民といふ言葉と共に、私には豆腐屋のラッパの音が聞こえて来る。秋刀魚を炙く煙が漂つて来る。配給所の前の長い行列が見えて来る。...(中略)...庶民といふ言葉は人間の日常生活と深く結ばれてゐる」。第3に、庶民はありのままの人間である。「一面からすれば、それは充足を求めぬ欲求がそのまま息づいてゐることを意味する。欲求の上に出て行かう

とする態度の欠如である。他面からすれば、人間の様々な弱点が蠢いてゐることを意味する。第4に、庶民は古くから存在する。「庶民の持つ古さといふことに想到すると、国民、臣民、人民は日本という社会のメンバーに加えられた抽象の産物、といふより、それ等は寧ろ庶民に加えられた抽象の産物であるとさへ考えたくなる。」

さらに清水は庶民の観念に別の視点からの分析を加える。人間の世界は二層構造をもっている。「直接的接触の世界」と「間接的接触の世界」である。「直接的接触の世界」とは、自分の目で見ることができて、自分の手で触れることができる、自分の周囲の狭い小さな世界のことである。狭い小さな世界ではあるけれども、人間の哀歓は主としてこの世界から生まれる。これに対して「間接的接触の世界」とは、「直接的接触の世界」の外側に広がる広く大きな世界のことである。それはジャーナリズムによってもたらされる種々の情報から構成されている。「間接的接触の世界」は「直接的接触の世界」を大きく包み込んで、それに不断に影響を与えているが、多くの人間はその事実鈍感である。「吾々の間に、ガンジーの暗殺を痛感して眠られぬ一夜を明かした人間を尋ねるのは困難であるが、足の腫物のために眠られなかった人間は稀ではない」(清水 1950: 293)。かくして清水は「専ら直接的接触の世界に住む人間の群」を庶民と名づけるのである。

もちろんジャーナリズムとの接触を一切絶って生活している人間というものは稀有であろうから、庶民は社会の大多数の成員の現実の姿そのものではなく、一つの抽象概念であることに注意しておく必要がある。事実、清水自身、論文の終わり近くで、「併し、それは本当にあるのか。私が作り上げてしまつたのか。今となつては、それさへ明らかではない」(清水 1950: 302)と述べている。(2)

しかし、論文「庶民」の一番の見所は、こうした庶民の観念の分析とは別のところにある。清水は分析の途中、唐突とも言えるタイミングで、「私自身が庶民なのである」という告白を含むところの次のような独白を行った。

思えば、私は沢山の文章を書き、幾度が演壇で叫びもした。さういふ場合、迂闊な私は相手の読者や聴衆を何時の間にか、これも実は抽象の結果にほかならぬが、完全な合理的存在に見立ててゐる。純粋な理性に向つて呼びかけてゐるつもりである。さうでない場合は相手を、国民、臣民、人民、何にせよ、完全な公共的存在に見立てて、これに向つて訴へてゐる。合理的存在か公共的存在か。つまり相手を庶民でないものと考へてゐるのである。併し以上は私の迂闊で済む。けれども相手が庶民であること

を知った時の私の態度は、到底迂闊などといふことでは済まされぬ。相手が公共的事柄に背を向けがちな、日々の欲求に気を奪はれるか、市井に投げ出された限りの人間であると知った途端に、私はその相手を見下してゐる。自らは指導者を以て任じ、「先進諸国では…」などと、外国の例を引き、而も外国の庶民でなく、聖書の言葉や行為を盾にとつて相手を戒める。誠に思ひ上がった振舞と評するよりほかはない。

それも自分が完全な合理的存在か公共的存在であるなら或る程度まで許されるであらうが、私自身が庶民なのである。もとより微賤の生まれであつて、庶民の哀歎は、本当のところ、一々この胸に堪へるのである。自らそれを知りながら、或いは知つてゐるためか、却つてこれを知らぬ様子で文章を書き演壇に立つてゐるのである。書いたり喋つたりする時に、自分が庶民であることを忘れるという滑稽な習慣は、何時の頃から、また如何なる原因から固定してしまつたのであらうか。恐らくはこれは成り上がった独裁者というものの心理であるに相違ない。(清水 1950 : 291-2)

注意すべきは、これがたんなる自己批判ではなくて、当時の清水がその1人であつたところの進歩的文化人への批判となっている点である。自分は進歩的文化人の1人ではあるが、他の進歩的文化人と違って、西洋市民社会における個人の理念を理想として自分たちの社会の庶民を見下すという思い上がりに気がついている。他の進歩的文化人が西洋から輸入した有名な思想に依拠して考え、語り、書いているのに対して、自分は庶民の思考や行動の背後にある「匿名の思想」の存在に気づいている。そう述べることで、清水は自分を他の進歩的文化人とは少し離れた場所に移動させた。庶民はそのための梃子の支点として使われているのである。

清水が「庶民の思想家」となつたのは、たんに彼が東京の下町(日本橋両国)の生まれで、父親の商売(竹屋)の失敗のため場末(本所)に引っ越し、そこで思春期を送つたからではない。出身は清水が「庶民の思想家」になるための下地ではあつても契機ではない。清水が「庶民の思想家」になつたのは彼が庶民の出身だからだというのは、1人の女性がフェミニズムの思想家になつた契機を彼女が女性として生まれたことに求めるようなもので、それでは他の女性がフェミニズムの思想家にならなかつた理由を説明できない。

清水が「庶民の思想家」になつた契機は3つあると思う。第1に、清水自身が「立身出世の学問的形態」と呼んでいる彼の人生において、庶民の出身であることを強く意識せざるを得ないような経験を重ねたこと。具体的には、同級生の父親の多くが医師であるよう

な独逸学協会学校中学の山の手風の雰囲気、やはり同級生の父親の多くが医師・弁護士・裁判官・外交官・華族・重役・官僚・大学教授であるような東京高等学校の上品で清潔な雰囲気、教員が教員である以前に官僚であるような東京帝国大学社会学研究室の暗く冷たい雰囲気、メンバーの大半が東京大学と京都大学の教員で占められていた平和問題談話会のサロンの雰囲気...、そうした雰囲気の中で、清水は自分が庶民の出身であることに矜持と劣等感を、エリートに対して憧憬と敵意を持つようになったのである。

第2に、清水の社会学における重要な要素である人間的自然 (human nature) の観念と庶民の観念が親和性をもっていること。人間も生物の一種である以上、生得的な欲求や行動様式をもっている。社会という人工の環境は、人間が生物的人間として振る舞うことを許さず、社会的人間として振る舞う (制度化された行動様式に従って欲求を充足させる) ことを求めるが、その要求が人間的自然にあまりに反するものであった場合には、人間は社会に適応することができず、社会は秩序を失う。「充足を求める欲求がそのまま息づいてゐる」と描写される庶民は、まさにこの人間的自然を体現する者である。

第3に、清水が高級ジャーナリズムに論文を寄稿するだけの書斎のインテリではなく、平和運動や米軍基地反対闘争の現場に出向くインテリであったこと。現場に出向けば、そこには必ず庶民がいる。清水は彼らを相手に講演や演説を行う機会が多かった。「私自身が庶民なのである」という自己提示は、語り手と聴き手の段差を小さくし、距離を縮め、心理的な一体感を醸し出す上で効果的だったろう。運動の渦中に身を置いているインテリにとって、庶民の共感を得ることは絶対に必要なことであった。

要するに、庶民という概念は、清水が自身を他の進歩的文化人と差異化するための、そして清水が参加していた社会主義的社会の実現を目指す運動のための、一種の戦略的概念であり、「庶民」およびその前後に発表された「匿名の思想」(『世界』1948年9月号)や「日本人」(『中央公論』1951年1月号)は庶民の概念化の試みであった。

更めて日本の中に、吾々の間に、庶民を見出し、その願望のうちに価値を、その経験のうちに方法を発見すると時、吾々は相共に新しい平面へ這ひ上がることが出来るであらう。(清水 1950: 302)

論文「庶民」の最後はこう結ばれている。このとき清水は庶民と同じ平面に立っていた。少なくとも同じ平面に立つことを目指していた。

4．大衆社会の到来

論文「庶民」から最終講義までの20年間、すなわち1950年代と1960年代は、戦略的概念としての庶民の妥当性・有効性が失われていく過程であった。着目すべき要因は3つあると思う。

第1の要因は、マス・コミュニケーションの高度の発達である。清水は『社会心理学』（1951年）の中で「マス・ソサイティ」（当時まだ「大衆社会」という訳語はなかった）を「新しい群集」として捉えている。群集とは都市的状况の中で台頭してきた無組織な人々の群れである。それは為政者にとっては大きな脅威であり、社会の変革を志向する組織にとっては動員すべきエネルギーである。日本では清水の生まれる2年前の1905年に起きた日比谷焼打事件が群集の起こした最初の事件として知られている。ル・ボンに代表される社会心理学者の多くは群集の非合理的（感情的）性質を強調したが、タルドは群集のような直接的接触ではなくマス・コミュニケーションによって間接的に結合する公衆という合理的（理性的）存在に期待した。清水は両者の見解を踏まえながら、マス・コミュニケーションの発達によって実際に生じていることは、公衆の出現ではなく、社会全体の群集化であると指摘している。すなわちマス・コミュニケーションの発達によって間接的接触の世界が急速に拡大したために、個人の情報処理能力がそれについて行けず、個人は個々の情報に対して合理的に対処することを放棄して、本来は複雑な情報を、偏見やステロタイプや二者択一（白か黒か、敵か味方か）といったフィルターを通して単純化して処理しようとする。そうした単純化へ逃避の欲求をマス・コミュニケーションは充足かつ助長し、その結果、マス・ソサイティは非合理性の支配する巨大な群集と化する。

ここで注意しなくてはならないのは、『社会心理学』におけるマス・コミュニケーションとは具体的には新聞とラジオのことで、当時、テレビはまだ日本社会に登場していなかったことである（NHKと日本テレビの本放送開始は1953年）。清水がテレビを本格的に論じたのは「テレビジョン時代」（『思想』1958年11月号）においてであるが、そこには次のような記述が見られる。

個人の自由な使用に委ねられている余暇がなかったら、革命というものは容易に起こり得なかったであろう。革命というのが少し大袈裟に聞こえるとしたら、人間の成

長とでも言い換えよう。とにかく、余暇において初めて可能になる苦悩、反省、勉強がテレビジョンによって不可能になり、人間が昼間は現実によって吸収され続け、夜はリアリティを以て迫る映像にノック・アウトされ続けていたら、与えられた現実を越えて行くという人間の態度はなかなか生まれるチャンスがないであろう。(清水 1958 : 359)

庶民の特徴の1つは「欲求の上に出て行かうとする態度の欠如」であるが、このことは「与えられた現実を越えて行くという人間の態度はなかなか生まれるチャンスがない」というのと同じことだろう。庶民に内在するこの負の性質はテレビの登場と普及によって一層強化された、と清水は見ているのである。

第2の要因は、生活水準の上昇である。都市化によって台頭してきたのが群集であるとすれば、産業化によって台頭してきたのが貧困問題であった。もちろん前近代社会にも貧困はあった。しかし貧困と貧困問題とは違う。貧困が社会問題になるためには、貧困を問題視するまなざしが存在しなくてはならない。日本において貧困が社会問題化するのはい清・日露の戦争の後からである。具体的には、松原岩五郎『最暗黒の東京』(1883年)や横山源之助『東京の下層社会』(1899年)に代表される大都市の貧民窟のルポルタージュ、大阪朝日新聞に連載された河上肇『貧乏物語』(1916年)などにそうしたまなざしを見ることができる。そうしたまなざしはやがて、貧困を個人の怠惰や不運に還元するのではなく、資本主義社会の構造的欠陥の必然的帰結であるとするマルクス主義の運動と結びついて行くことになる。20世紀は社会主義の世紀と呼ばれることもあるが、社会主義の世紀は多くの国々で貧困問題が社会問題の中心を占めていた世紀でもあった。しかし、日本では戦後の高度成長によって、貧困問題が解消とまではいかなくとも、中心的な社会問題の地位から退いたという事情がある。

清水は「六〇年代について」(『中央公論』1969年12月号)の中で、1960年代を1930年代と対比しつつ、次のように述べている。

一九三〇年代を特別の十年間たらしめていたのは、大部分、雇用の問題であった。一九六〇年代の上一九三〇年代の影が射しているように感じられるのは、一九六〇年代も、部分的ながら、雇用の問題の大きさを教えているからである。但し、一九三〇年代の問題が大量失業であったのに対して、一九六〇年代が暗示しているのは完全

雇用の問題である。雇用 - という、人間の生物的社会的条件 - に関する限り、一九三〇年代の初めから一九六〇年代の終わりに至る四十年間で、人間というものの幅が尽きているように思われる。四十年間で、人間は一つの極限から他の極限まで来てしまったような気がする。(清水 1969c : 308)

第3の要因は、社会主義的社会の実現を目指す運動からの清水の撤退である。大衆社会の到来を論じつつも、運動に参加していた1950年代、清水は大衆(新しい群集)に呼びかけていた。たとえば、『社会心理学』(1951年)では、諸集団の分裂・対立の中で家族や国家に逃避し、マス・コミュニケーションの混沌の中で既成の偏見やステロタイプに逃避し、巨大な組織の中での無力感からカリスマ崇拜やセクショナリズムに逃避する現代人の心理を分析しつつも、最後に、階級への同一化、イデオロギーの復権、そして世界的規模の社会主義的組織の実現について語っている。

巨大な群集である現代の社会は、このような積極的適応の発達を通じて、更めて、一つの大きな公衆になることが出来るであろう。即ち、人間は、新しい条件を受け入れることによつて、一方、理性を有しつつ、他方、社会を有することが出来るのであらう。(清水 1951 : 170)

大衆社会的状況を大衆自身が乗り越えるための祈りにも似た語り口は、『社会学入門』(1959年)にも見られる。西洋では個人の存在が前提とされた上で大衆が問題になり、個性の喪失が問題になっているが、日本の場合は事情がまったく違う、と清水は言う。

私の考えでは、日本では事態が逆なのである。むしろ、日本における大衆の発展によって個人らしい個人が生まれかけているのだと思う。...(中略)...それでは組織化がこのまま進んでいきさえすれば、それで万事OKなのかあろうか。そうではあるまい。むしろ、組織化が一種の行きづまりに達しているところに、少なくとも、組織化の新しい条件が発生しているところに、今日における大衆観念の氾濫の原因の一つがあるように思う。(清水 1959 : 237-9)

そして清水が大衆の組織化のための核ないし基礎となる中間集団として名指ししたのが、

階級と民族の2つであった。どちらも手垢にまみれ、時代遅れになろうとしている観念であったが、清水は新しい条件（ホワイトカラーの増大、アジア・アフリカにおける民族独立運動など）の下、この2つの観念を改めて規定し直すことで、大衆の組織化が可能になると懸命に説いている。『社会学入門』初版から11年後、1970年に同書が潮文庫に収められることになったとき、清水は文庫版のための「あとがき」の中で、11年前を回想して、次のように述べている。

他の書物と違って、『社会学入門』を書いた時の私は、政治運動に積極的に関係していた。というだけでなく、この時期に書いた他の著作に比べて、本書は、現実との噛み合いが深く、政治運動との関係が強かった、と言うべきであろう。…（中略）…政治運動との研究者としての要求と運動家としての要求との間に立って、私は何度も当惑した。『社会学入門』は、私が二つの要求を何とか調和しようとした一つの試みである。それが成功したか否かは知らないが、安保闘争の敗北の後に研究生生活に没頭するようになった私にとって、そこには、或る時期の自分というものが深く刻み込まれているように思われる。（清水 1970：197-8）

『社会学入門』から3年半後、清水は「新しい歴史観への出発」（『中央公論』1963年12月号）を発表して、社会主義の思想と最終的に決別した。以後、清水が大衆（マス・コミュニケーションの発達と生活水準の上昇によって肥大化した庶民）に向かって語りかけることはなかった。大衆は分析され批判されるだけの存在になった。

5．社会と個人の問題

『倫理学ノート』の「余白」の末尾で「貴族」対「大衆」というオルテガ流の図式を持ち出してきたとき、清水は、この2つのカテゴリーが社会的階層ではなく、貧富、職業、学歴などとは無関係な精神的階層に対応したものであることを強調した。すなわち「貴族」とは「無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者」のことであり、「大衆」とは「自分に何一つ要求を課することなく、現にある自己のままで生きる多数者」のことである。精神的階層という概念は、人間の欲求には低次なものから高次なものまであって、個人は階段を上るように低次な欲求から高次な欲求へと関心の対象を

移していく、それが精神的な成長である、という考え方と結びついている。こうした考え方は古来よりあるわけだが（たとえば「衣食足りて礼節を知る」）、未曾有の失業と飢餓の時代（1930年代）から高度大衆消費時代（1960年代）への30年間で、飢餓の恐怖（失業の不安）から解放された個人の欲求が低次なものから高次なものへ移行するであろうという従来の仮説は間違いであったことが検証された、と清水は考える。

所得の増加に伴って、自然的欲望を満たすための手段が上質になって行ったことは広く認められるけれども、古来の人々が信じていたほど容易に欲望が精神的なものに成長するという兆候は見られない。彼らが説いたように、精神的欲望が人間の内部に最初から潜んでいて、自然的欲望が満たされる瞬間を待っていたとは考えられない。...（中略）...欲望の自然的成長を説いた人々は、例外なく、自分の内部に欲望の自然的成長を見出すような、選ばれた少数者であったところから、無意識のうちに、そういう成長の型を一般の大衆に押しつけていたのであろう。言い換えれば、彼らは、人間が生物的存在であることを、また飢餓を中心とする自己保存の自然的欲望が決定的な意味を持っていることを忘れていたのであろう。従って、それが満たされた後の人間の行動をリアルに考えることが出来なかったのであろう。（清水 1972b： 337）

清水の見るところでは、飢餓の恐怖（雇用の不安）から解放された人々は、「自然によって人間の内部に植えつけられた性の無制限の解放と、破壊本能の直接的満足としての暴力の解放とを求めて、同じ自然的平面を動いている」（清水 1972b： 343）。大衆を相手とするマス・メディアは性と暴力をテーマとして、その欲求を不断に刺激することで、人々が自然的平面に留まることに貢献している。実際、清水が学習院大学で教鞭を執った最後の年である1968-9年は「ゲバルト」と「ハレンチ」という言葉が流行した年であった。

しかし、1968-9年は当時の若者たちの間でフォークソング・ブームが頂点を迎えた年でもあった（古茂田信夫ほか 1995）。当時のフォークソングの中に若者たちのメンタリティをよく表している言葉を探すならば、それは「やさしさ」と「むなしさ」であろう。「やさしさ」は他者との親密なコミュニケーションを志向する言葉であり、「むなしさ」は自己の内部に存在する空洞を示す言葉である。性と暴力（どちらも身体的＝直接的経験である）にはその「むなしさ」を埋める機能が合ったことは確かだが、当時の若者たちの多くは、「むなしさ」を埋めるものを性や暴力とは別の平面に存在する「生き甲斐」（これもまた当

時の流行語の一つであった)に求めていた。この「生き甲斐」という言葉は、変奏曲における主題のように、70年代には「自分らしさ」や「アイデンティティ」に、80年代には「自己実現」に、90年代には「自分探し」に言い換えられていくわけだが、こうした「生き甲斐」の欲求の系譜を清水は軽視していた節がある。

清水が身近に接する学生の質の変化という観点から自分の大学教師としての20年間で3つの時期(1950年代前半、1950年代後半、1960年代)に区分したことはすでに述べたが、学生の質の変化を象徴するものとして清水が取り上げているのは職業選択に関する彼らの言動である(清水 1974: 69)。卒業後の進路について尋ねると、第1期(1950年代前半)の学生たちは「新聞記者になります」とか「労働組合の書記になります」とか即答したという。第2期(1950年代後半)の学生たちは、即答を避け、逆に、人生の意味や目的について清水に質問してきたという。人生問題の大部分は職業問題であるとする清水は、「そういう問題は、君の職業が決定した途端に解決するよ」と答え、実際、職業が決定すると彼らは明るい表情になったという。では、第3期(1960年代)はどうか。

第三期は、高度成長に入ってからで、私が卒業後の職業について質問しますと、何という馬鹿な質問をする先生だろう、という表情をする学生が殖えて来ました。前に述べた完全雇用のため、贅沢を言わなければ、何処かが採用してくれる、新聞社が採用してくれたら新聞記者になる、銀行が採用してくれたら銀行員になる、石油会社が採用してくれたら石油屋になる、という訳で、自分の職業を決めるのは、自分ではなく、企業である、社会である、どちらに転んでも食いつぶれはない…。こうなりますと、大学はもう、教育施設らしい緊張した空気を維持することは出来ません。人生と社会との関係を胡麻化した青年のレジャー施設になります。(清水 1974: 69)

ここには一種のカリカチュアが施されていると考えるべきだろうが、それにしても、第3期の学生が職業選択において職種を問題にしなかったというのは誇張が過ぎるのではないだろうか。「自分の職業を決めるのは、自分ではなく、企業である」とあるが、確かに採用を決めるのは企業の側に違いないとしても、どの企業の採用試験を受けるかを決めるのは学生自身である。新聞社、銀行、石油会社...、清水が例にあげている企業は業種という点では一貫性に乏しいが、いずれも大企業である。つまり学生は大企業を志向しているのである。大企業の一員として働くことを希望しているのである。職業はさまざまな要素が

ら構成されており、企業規模（あるいは企業の知名度）はその一つである。職種（仕事内容）を問わないからといって、職業を問わないわけではない。企業の規模や知名度はそこに就職する学生の自尊感情に影響する。大企業や有名企業に就職することはそうした要素を重視する学生に大きな満足を与えるだろう。しかし、大企業や有名企業は採用人数も多い代わりに学生の人気も高いから、現実には、大企業や有名企業を志向する多くの学生は中小企業や知名度の低い企業に就職せざるを得ないことになる。ここに現代における職業問題が生じる。それは人生問題であると同時に社会問題でもある。清水もこの点に言及している。

私が強調したいのは、完全雇用の時代だからこそ職業教育を大切にすべきだということです。あまり文句を言わなければ、何かしら仕事がありますが、そういう仕事は、少年の日から志したものでなく、それへ向かって自分を鍛え上げて来たものでもありませんから、当然、その仕事に「心ならずも」従事している人間が日本中に殖えて来ています。...（中略）...プロであるという静かな自負、それに支えられた謙譲、そういう平凡な、しかし大切なものが欠けた社会は、時々刻々、苛立った人間に満ちた社会、住みがたい社会になって行きます。（清水 1974： 79）

他方、希望どおり大企業や有名企業に就職できた学生も別の問題と遭遇する。それはジンメルが『社会学の根本問題』の中で「原理的に解決しがたいもの」と述べている社会（組織）と個人の対立の問題である。

社会は一つの全体、一つの有機的統一体であろうとし、各個人を単なる手足たらしめようとする。出来れば、個人は、手足として果たすべき特殊な役割に全力を傾注し、この役割を立派に果たす人間になるように自己を改造せねばならない。ところが、この役割に向かって、個人自身の持つ統一体への衝動及び全体性への衝動が反抗する。個人は社会全体の完成を助けるだけでなく、自己自身の完成を欲し、自己の全能力を発揮することを欲し、社会の利益が諸能力間の関係に如何なる変更を要求しようと意に介さない。メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と、自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争は、原理的に解決しがたいものである。（Simmel 1917 [清水訳 1979 : 94-5]）

清水はもちろんこの社会と個人のディレンマを知っている。なぜならこのジンメルの記事は清水自身が訳したものであるからだ。そして現代における「メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と、自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争」は、ジンメル時代よりも激しさを増している。個人の所属する集団・組織がより巨大化している一方で、「自己実現」や「自分探し」の欲求はより大衆化してきているからである。しかし、清水は「生き甲斐」「アイデンティティ」「自己実現」「自分探し」の系譜に属する欲求というものを、高次の欲求として評価してはいなかった。自己の存在価値を自己の内部に求める傾向に清水は批判的だった。

人間の内部に意味があると思うのは、近代思想の生んだ錯覚である。人間を自然や社会から切り離して、独立の高貴な存在に祭り上げた時、錯覚は快かったであろう。しかし、この独立の高貴な存在の中に意味を探して見出されない時、錯覚は苦いものになる。人間の意味は、いつも人間の外部にある。人間の意味は、社会の中にある。それが言い過ぎであるなら、人間の意味は社会との関係の中にあると言い直してもよい。個性も大切であろう。独創性も大切であろう。けれども、それは、個性や独創性が社会の中で或る優れた働きを営み、或る客観的な成果を生んだ場合のことで、人間の内部に眠っている個性や独創性というのは、吹けば飛ぶようなものである。(清水 1972a : 48-9)

戦後日本の教育は「人間の内部に意味がある」という近代思想の生んだ錯覚を継承してきた、と清水は考える。子供の個性や独創性といったものを重視してきた結果、子供は職業というものを自己実現のためのチャンネルとしてのみ考えるようになり、必然的に、肥大した自己イメージと現実の職業との間に不協和が生じる。職業という社会と個人とを結び付ける役割をめぐって生じているこうした不協和は、「メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と、自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争」には違いないが、ジンメルのような原理的に解決困難な現象ではなく、「自ら一個の全体たらんと欲する」欲求の幼児的（自己中心的）性質の故に、一種の病理現象とみなされるのである。そしてこの病理に対する処方箋として清水は、職業教育の充実と、道德教育の必要（教育勅語の再評価）を提唱したのである。

6 . 愛国と社交

機械のような集団(巨大な組織)がアナーキーに林立する大衆社会(マス・ソサイティ)。その中で、機械の部品となり、かつ心理的に不安定な状態に置かれている個人。清水がイメージする現代社会と個人の関係とはこのようなものである。それは『社会心理学』(1951年)において提示され、以後、清水の中で、変わることがなかった。

明るい筈の分化の果てに、吾々は無政府状態の中に立たされてゐる。併し、自己の全体を前近代社会的集団に委ねてゐる場合と異なり、現代の人間は自己の存在を多くの集団に分割してゐるのであるから、集団の間の連絡及び調和の欠如乃至闘争は、やがて、人間内部の無政府状態を生み出す。人間は、その統一体としての外観にも拘らず、その内部は混乱によつて充たされてゐる。けれども、外部の諸集団の間に無政府状態があらうと、自己の内部に混乱があらうと、人間は、その中で自己に統一を与え、また、何よりも、自己及び家族に物質的生活の基礎を与えねばならぬ。かうして、人間は積極的活動の主体としてよりも、言つてみれば、苦痛の感覚或は不安の感情として存在する。(清水 1951 : 121)

変わったのは、こうした状況へのあるべき適応の仕方である。『社会心理学』では、「家族への逃避」と「国家への逃避」が消極的適応として批判されていた。

「家族への逃避」とは、家族という集団を理想的な集団に見立てて、そこに温かいパーソナルな人間関係を求める傾向のことである(俗に言うマイホーム主義がこれに相当するだろう)。しかし実際の家族はそうした過剰な期待に応えるにはあまりにも無力であると清水は考える。

今日の家族は無力である。併し、吾々は資本主義社会に住む限り、この無力な家族のうちで、外部の社会の混乱及び矛盾の帳尻を合せなければならぬ。社会は、その内部に混乱と矛盾とを含みながら、それが一つ一つの無力な家族の内部で解決されることを期待してゐるのである。各成員が家族に向かつて過大の主観的或は個人的な期待を寄せてゐるだけでなく、実は、第二次的集団のコンプレックスとしての社会そのも

のが、家族に向つて過大の客観的或は社会的な要求を提出してゐると言わねばならぬ。かう見て来れば、人間は敢へて自ら家族へ逃避するまでもなく、社会そのものの力によつて家族へ突き戻されてゐるのかも知れない。(清水 1951 : 125)

「温かな家族」「やすらぎのある家庭」といった近代社会の家族についての言説を清水は信じていない。家族の無力さ(機能の乏しさ)と非合理性についての清水の見解は、彼の人生経験を反映したものである。東大の学生だった頃、指導教授であり家族研究の専門家であった戸田貞三との関係の中で、家族社会学の文献を渉猟してはみたものの、一向に面白くなく、田山花袋の『生』を読んで、アカデミックな家族研究の皮相さに愛想づかしをしたというエピソードを清水は自伝等で繰り返し語っている(清水 1949、1956、1975、1985)。

一方、「国家への逃避」とは、自己を国家のうちに埋没させ、自己を国家と同一化しようとする傾向のことである。

無数の集団の交錯のうちに自己を見失つてゐる人間、不断に無力の感情に苛まれる人間は、一般に、自己の属する国家が暴力機構を拡大充実することを喜び、進んで国家の対外的な強硬政策を指示する傾向を示してゐる。...(中略)...自己を偉大なるもの或は強大なもの一部分たらしめて、無力の感情から救われようとする一般的傾向のうちに、吾々は、フロムの所謂「ファシズムの人間的基础」(human basis of fascism)を見出すことが出来るであらう。(清水 1951 : 126)

『社会心理学』出版の前年(1950年)、朝鮮戦争が勃発し(6.25)、マッカーサーは7万5千人の警察予備隊創設と海上保安庁8千人の増員を指示し(7.8)、警察予備隊令が公布され(8.10)、GHQは新聞社に共産党員および共産党シンパの追放を指示し(7.24)、政府は公務員に対するレッドパージの方針を決定した(9.1)。この年はまた清水の『愛国心』(岩波新書)が出版された年でもある。愛国心が語られるとき、そこには敵視の対象(外部集団)としての敵国が想定されているが、当時、愛国心の語り手によって、その他国はソ連であったり(たとえば吉田茂の場合)、アメリカであったりした(たとえば徳田球一の場合)。清水は、それがどのような立場からのものであれ、愛国心を実体化する一切の試みに反対するという立場をとった。なぜなら愛国心の実体化は戦争の勃発の可能性を高める

からである。

それから 30 年後、清水は米ソの軍事的バランスの崩壊（ソビエトの優位）という危機的状況（新しい戦後）の認識に立って、日本の軍事力増強の必要性を論じた『日本よ 国家たれ』（1980 年）を出版した。

国家には色々な側面があり、従って、色々な解釈が可能である。しかし、国家というものをギリギリの本質まで煮つめれば、どうしても、軍事力ということになる。ところが、その軍事力の保持が、日本の徹底的弱体化を目指して、アメリカが日本に課した「日本国憲法」第九条によって禁じられて来たのである。…（中略）…日本はその経済力に相応しい軍事力を整備することによって、米ソの軍事的バランスの崩壊を阻止し、それを通じて、日本の安全を守り、世界の、特に極東の平和に積極的に寄与しなければならない。軍事力の回復及び増強によって、日本が一人前の国家になることが、現実的な、日本国籍の平和運動であると思う。（清水 1980：239-40）

『社会心理学』で「国家への逃避」を批判していたときの清水は反米的ナショナリストであったが、『日本よ 国家たれ』の清水は反ソのナショナリストである（ただし決して親米的になったわけではない）。「一人前の国家」という表現からもうかがえるが、清水は国際社会における日本と、大衆社会における個人を重ね合わせているところがある。

国家というものを煎じ詰めれば、軍事力になり、軍事力としての人間は、忠誠心という人間性に徹した存在でなければならぬ。自分を越えたものの存立及び発展のために自分を捧げ、それによって深い満足を得るという傾向、それは万人の内部に潜む人間性であるが、この傾向を純化したところに、軍事力としての人間が実現される。これに対して、社会の実質は、究極において、経済活動である。…（中略）…経済活動に従う人間を動かすものは、これも万人共通の人間性としての利己心である。国家であることを止めて、社会になった日本は、忠誠心を不要にし、利己心だけを必要とした。（清水 1980：66）

『倫理学ノート』の末尾で登場した「貴族」の観念に照らしてみるならば、「自分を越えたものの存立及び発展のために自分を捧げ、それによって深い満足を得る」人間は、貴族

にほかならない。自衛隊員も、清水が日本青年会議所に寄付した自家版の『日本よ国家たれ』二千部を携えて全国行脚に出かけた「キャラバン隊」の青年たちも、貴族である。遡れば、60年安保闘争のときの全学連主流派や、内灘闘争における共産党の若者たちも、貴族の資格を有していただろう。清水はイデオロギーの左右を問わず集団のかかげる高い目的のために - 利己心や集団それ自体の維持のためではなく - 献身的に行動する若者たちの姿に胸を打たれることがしばしばあった。たんに国際政治のバランスのためばかりではなく、そうした若者たちが自己を同一化できる国家であるために、すなわち「国家への逃避」ではなく「国家への献身」のために、日本の軍勢力増強は必要であると清水は考えていたのだらう。

清水はその生涯に94冊の著作（翻訳や編著を除く）を出したが、その93冊目、書き下ろしとしては最後の著作となったのが『「社交学」ノート』（1986年）である。清水は学習院大学退職後、新宿区大京町の野口英世記念館の一室を購入し、清水研究室を設け、荻窪の自宅から毎日そこに通って「倫理学ノート」を執筆した。

ところが、幾日か経って、原稿を書いている途中、ボールペンを擱いた瞬間、私は、何と表現したらよいか判らない暗い感情に襲われました。それが何度もありました。この感情は、「物足りなさ」のようでもあり、「空しさ」のようでもあり、「憂鬱」のようでもあり、「淋しさ」のようでもありましたが、とにかく、生まれて初めて知る厭な気分でした。...(中略)...一体全体、この感情は何なのか。何と名づけたらよいのか。それを考えた揚句、図らずも、私は「孤独」という言葉にぶつかりました。ああ、これが「孤独」というものなのかも知れない。しかし、不思議なもので、自分の曖昧な気持ちを仮に「孤独」と呼んでみた時、私は自分の気持ちが俄に恐ろしいものを感じられて来ました。(清水 1986 : 32-33)

おそらく清水が感じた「孤独」は、学習院大学を退職したことでそれまであった学生や同僚との日常の相互作用が失われ、その一方で、「倫理学ノート」の連載という緊張状態の持続から来る、一種の鬱状態ではなかったかと推測されるが、この「孤独」から清水を救ったのが1969年9月からスタートした清水研究室談話会であった。毎月1回、ゲストスピーカー(清水自身がスピーカーとなることもあった)を招いての一種のサロンであるが、毎回の出席者は20~30名ほど、フェイス・トゥ・フェイスの関係を維持するにはちょう

どよい規模のスモール・グループであった。『「社交学」ノート』はこの清水研究室談話会の変遷を辿りながら、現代社会における社交の意味について考察した本である。

平素、「生命のある機械」の「生きた部品」として生きている、そうでなければ生きられぬ人たちにとって、私たちのスモール・グループは、必ずしも小さくない意味を持って来たかと思えます。(中略)

捨象されても、存在するものは存在します。それに相応しい表現や満足の機会を求め続けます。「人間性の回復」というような物々しい言葉は、私の好むところではありません。しかし、私たちのスモール・グループは、多少とも、その部分的回復に役立って来たのではないかと考えます。そうとでも考えなければ、そもそもメンバーの長期に亘る熱心な参加や協力という事実を私は理解することが出来ないのです。

いいえ、再び、それにもまして、自分を大衆から区別しよう、大衆の波に呑み込まれまい、そういう健全な欲求が人々を動かしているように思われます。(清水 1986 : 229-30)

談話が社交の本質である、と清水は考える。同じスモール・グループでも、家族にあっては、とくに日本の家族にあっては、談話というものが困難である。むしろ言葉を必要としないこと、逆に言えば、言葉を必要とするときにはかえって話がこじれてしまうのが家族というものである、と清水は考える。家族に多くを期待しない、期待してはならない、という認識はかつてと変わらない。しかし大衆社会的状況の中で貴族としての矜持をもって生きていくためには、自己を超えるもの、国家へのコミットメントだけでなく、日常生活の平面から自由なもの、社交的なスモール・グループへのコミットメントも不可欠である、と清水は考えたのである。

『「社交学」ノート』は、小さく、軽い装幀の本ではあるが、清水の思索の軌跡の到達点である。清水は「社交の勧め」という意味でこの本を書いたと「まえがき」で述べている。一体、清水は誰に対して社交を勧めているのだろうか。「自分を大衆から区別しよう、大衆の波に呑み込まれまい、そういう健全な欲求」をもった人々に対してである。それは貴族ではなく(貴族であれば勧められるまでもなくすでに社交を実践しているはず)、大衆一般でもなく、貴族を志向する一部の大衆ということになるだろう。自分を大衆から区別しようとする大衆。それは 60 年代の高度成長期の大衆ではなく、80 年代の安定成長期の大衆

である。そうした大衆の変質に清水は気づいていたのだろうか。

たとえば山崎正和はそうした大衆の変質に気がついていた。山崎によれば、オルテガが『大衆の反逆』で描いた大衆は、標準的な生活に甘んじ、いまの自分に安住し、その保持に腐心する人間であったが、現代の大衆は自身の消費生活を通じて他人とは違う個性的な存在であることを求められている。

彼らにとって、自己とは、ただ頑迷に保持すべき存在でもなく、克己的に否定すべき存在でもなく、むしろ、みづからが日々発見して行くべき柔軟な存在になった、といえるだろう。(山崎 1984 : 169)

ここから山崎は後に『社交する人間』(2003年)として結実する社交論を展開していくことになるのだが、山崎の『柔らかい個人主義の時代』(1984年)を意識してであろう、清水も『「社交学」ノート』の中で次のように述べている。

何人かの著述家は、これらの欲求(自分を大衆から区別しようという欲求 - 筆者注)に気づいておられます。この方々は、それぞれ、著書や論文を発表して、そのタイトルに、「優しい...」、「柔らかな...」、「ソフトな...」という文字を用います。タイトルだけでなく、著書や論文の内容においても、これらのものの大きな意味を論じています。優しいもの、柔らかなもの、ソフトなもの...、それに、私は、有機的なもの、パーソナルなもの、ヒューマンなもの...を加えるべきかと考えています。別の文脈で見れば、私は、「剛毅なもの」を初めとする幾つかのものを挙げたいのですが、今は、文脈が違うのです。(清水 1986 : 231)

大衆社会の中で、人間が心理的に分裂せずに、貴族として生きていくためには、愛国と社交、その両方が必要であると、清水は考えていたのである。

『「社交学」ノート』の出版から2年後、1988年8月10日、清水は81年の生涯を閉じた。ベルリンの壁の崩壊(1989年11月)に先立つこと1年3ヵ月、ソビエト連邦の解体(1991年12月)に先立つこと3年4ヵ月)のことだった。清水は「新しい戦後」(米ソの軍事的バランスの崩壊)という時代認識の中で晩年の思索を展開し、その「新しい戦後」の崩壊を目の当たりにすることなく死んだ。

注

- (1) 清水の退職の理由としては学内政治の問題も大きかったようである。清水は1960年頃に学習院大学政治学科の主任となり、カリキュラム改革にあたったが、「私が計画を発表した途端、私たち教師の間に、論争というか、喧嘩というか、とにかく、面倒な関係が生まれて、それが長く続くことになった」(清水 1980:99)と後になって述べている。ちなみに、そのとき、清水が提案し、誰も問題にしてくれなかった新設科目が1つあり、それは「軍事科学」の講義であったという。
- (2) 中筋直哉は、清水についての小伝の中で、「当時の代表作とされる「庶民」の論文と、彼が支援した基地反対闘争の当事者との論争「内灘村長への手紙」との間にある落差には、出自としての庶民に深く執着しつつ、現実の庶民にはあくまでも進歩的文化人として対立する他ない彼の思想の不可能性が露呈している」(中筋 1998:621。ただし傍点は筆者による)と述べているが、この見解は「庶民」を实体概念としてとらえている点で問題がある。また、「内灘村長への手紙」の解読にあたっては、清水は内灘村長を権力者として見ており、内灘村民一般とは区別している点(清水 1957)に留意しておく必要があるだろう。

引用文献

* 清水の著作からの引用にあたっては、『清水幾太郎著作集』全19巻(講談社、1992-1993)所収のものについては、その巻数と該当ページを表記する。

古茂田信夫ほか、1995、『新版 日本流行歌史 下』社会思想社

文部省、1972、『学制百年史』資料編

中筋直哉、1998、「清水幾太郎」、川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝』勁草書房：619-630

清水幾太郎、1949、『私の読書と人生』要書房(『著作集』第6巻：359-483)

、1950、「庶民」『展望』1月号(『著作集』第8巻：285-302)

、1951、『社会心理学』岩波書店(『著作集』第9巻：3-186)

、1956、『私の心の遍歴』中央公論社(『著作集』第10巻：233-421)

、1957、「最近の内灘」『世界』4月号：217-23

、1958、「テレビヴィジョン時代」『思想』11月号(『著作集』第9巻：341-65)

- 、1959、『社会学入門』(カッパブックス版) 光文社
- 、1969a、「最終講義 オーギュスト・コント」『中央公論』3月号(『著作集』第11巻：265-93)
- 、1969b、「戦後史をどう見るか」『諸君』7月号(『著作集』第17巻：292-309)
- 、1969c、「六〇年代について」『中央公論』1969年12月号(『著作集』第11巻：295-311)
- 、1970、『社会学入門』(潮文庫版) 潮出版
- 、1972a、『本はどう読むか』講談社現代新書
- 、1972b、『倫理学ノート』岩波書店(『著作集』第13巻)
- 、1974、「戦後の教育について」『中央公論』11月号(『著作集』第17巻：52-83)
- 、1975、『わが人生の断片』文藝春秋(『著作集』第14巻)
- 、1980、『日本よ国家たれ』文藝春秋
- 、1985、「私の一生を決めた田山花袋『生』」『新潮45+』1985年3月号(『著作集』第19巻：55-8)
- 、1986、『「社交学」ノート』ネスコ

Simmel, G., 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, (清水幾太郎訳、1979、『社会学の根本問題』岩波文庫)

山崎正和、1984、『柔らかな個人主義の時代』中央公論社

[付記]

本論文は、2006年 - 2007年度科学研究費補助金(基盤研究C)「清水幾太郎と彼らの時代」(課題番号18530411)による研究成果の一部であり、早稲田社会学会の機関誌『社会学年誌』48号(2007年3月)に掲載された。